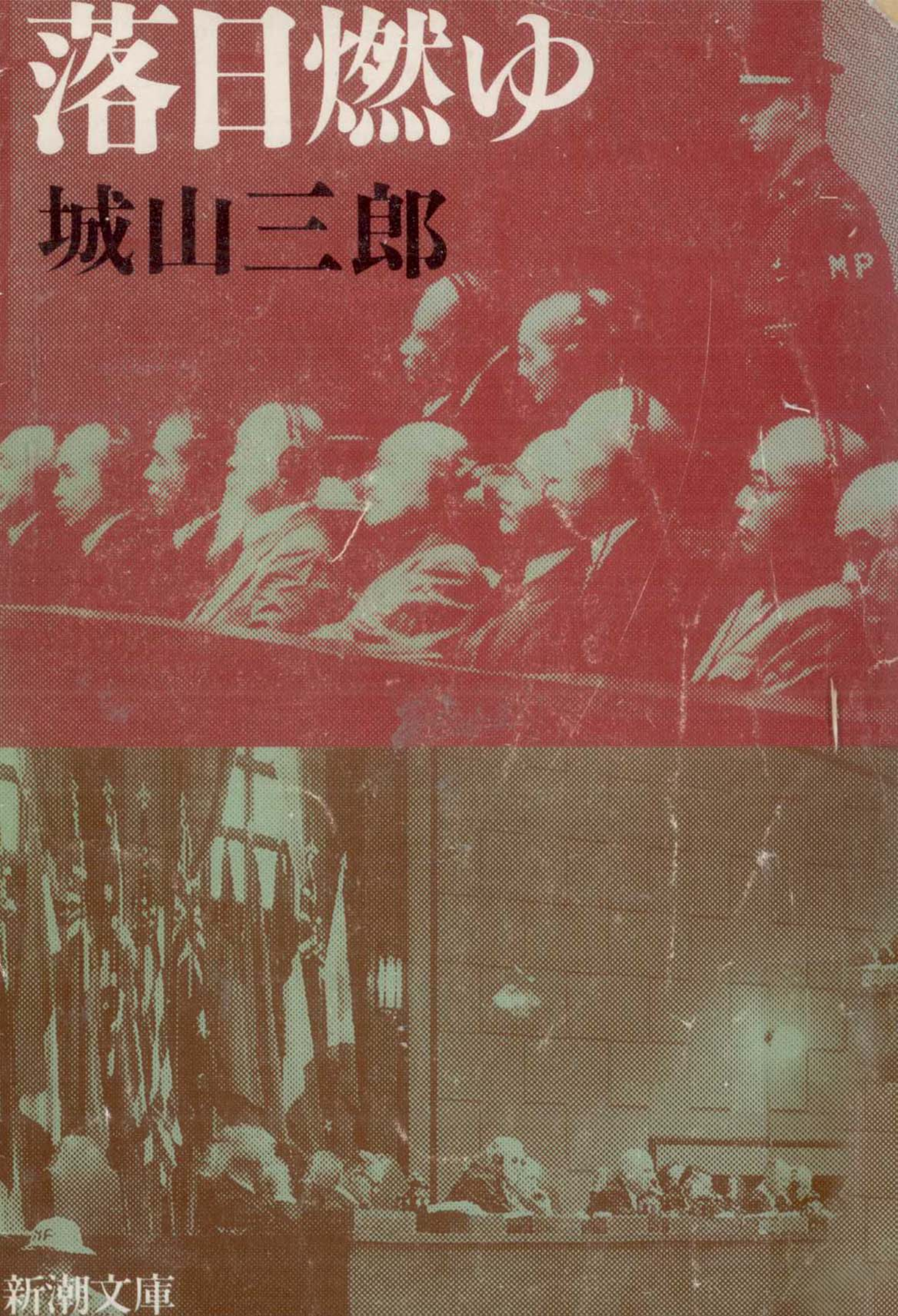
# 落日燃ゆ

城山三郎



新潮文庫

# 落日燃ゆ

新潮文庫　し-7-18

昭和六十一年十一月二十五日　発行
昭和六十三年五月二十五日　三刷

著者　城山三郎
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(〇三)二六六—五一一一
編集部(〇三)二六六—五四四〇
振替東京四—八〇八番
定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

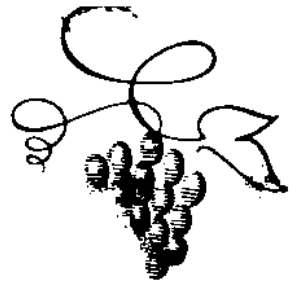
印刷・錦明印刷株式会社　製本・錦明印刷株式会社
© Saburō Shiroyama 1974　Printed in Japan

ISBN4-10-113318-2 C0193

新潮文庫

# 落日燃ゆ

城山三郎著



新潮社版

3719

# 落日燃ゆ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

# はじめに

昭和二十三年十二月二十四日の昼下り、横浜市西区のはずれに在る久保山火葬場では、数人の男たちが人目をはばかるようにしながら、その一隅の共同骨捨場を掘り起し、上にたまっている新しい骨灰を拾い集めていた。

当時、占領下であり、男たちがおそれていたのは、アメリカ軍の目であったが、この日はクリスマス・イブ。それをねらい、火葬場長と組んでの遺骨集めであった。

やがて一升ほどの白っぽい骨灰を集めると、壺につめて、男たちは姿を消した。

骨壺は男たちによって熱海まで運ばれ、伊豆山山腹に在る興亜観音に隠された。

その観音は、中支派遣軍最高司令官であった松井石根大将が、帰国後、日中両国戦没将兵の霊を慰めるために建立したもので、終戦後の当時は、ほとんど訪れる人もなかった。骨壺を隠して安置しておくには、絶好の場所でもあった。

骨壺の中には、七人の遺骨がまじっていた。

土肥原賢二（陸軍大将、在満特務機関長、第七方面軍司令官、教育総監）

板垣征四郎（陸軍大将、支那派遣軍総参謀長、朝鮮軍司令官）
木村兵太郎（陸軍大将、関東軍参謀長、陸軍次官、ビルマ派遣軍司令官）
松井石根（陸軍大将、中支派遣軍最高司令官）
武藤章（陸軍中将、陸軍省軍務局長、比島方面軍参謀長）
東条英機（陸軍大将、陸相、首相）
そして、ただ一人の文官、
広田弘毅（外相、首相）

七つの遺骸は、その前日、十二月二十三日の午前二時五分、二台のホロつき大型軍用トラックに積まれて巣鴨を出、二台のジープに前後を護衛され、久保山火葬場へ着いたもので、二十三日朝八時から、アメリカ軍将校監視の下に、荼毘に付された。

遺族はだれも立ち会いを許されなかった。それどころか、遺骨引き取りも許可されなかった。

アメリカ軍渉外局は、

「死体は荼毘に付され、灰はこれまで処刑された日本人戦犯同様に撒き散らされた」

と、発表した。アメリカ軍が持ち去った遺骨は、飛行機の上から太平洋にばらまかれたというわさであった。狂信的な国粋主義者が遺骨を利用することのないようにとの配慮からだとされた。

ただし、アメリカ軍は七人分の骨灰のすべてを持ち去ったわけでなく、残りは火葬場の隅の共同骨捨場へすてられた。男たちは、それをひそかに掘り返し、興亜観音へ隠したのであった。

それから七年、昭和三十年四月になって、厚生省引揚援護局は、この骨灰を七等分し、それぞれ白木の箱に納めて、各遺族に引き渡した。

だが、広田の遺族だけが、「骨は要りません」と、引き取りをことわった。

すでに遺髪や爪を墓に納めてあり、だれの骨灰ともわからぬものを頂きたくないという理由からであったが、それは、表向きの理由でしかなかった。

昭和三十四年四月、興亜観音の境内に、吉田茂の筆になる「七士の碑」が建てられ、友人代表としての吉田茂や荒木元大将はじめ遺族やゆかりの人約百人が集まり、建立式が行われた。

だが、このときも、広田の遺族は、一人も姿を見せなかった。

広田の遺族たちは、そうした姿勢をとることが故人の本意であると考えていた。広田には、ひっそりした、そして、ひとりだけの別の人生があるべきであった。せめて彼岸に旅立ったあとぐらい、ひとりだけの時間を過させてやりたい。

たとえ、事を荒立てるように見えようと、心にもなく参加すべきではないと、考えていた。

「日本は英雄を要しない。われわれは、天皇の手足となってお手伝いすればよいのだ」

と、外相時代、よく部下にいっていた広田。
そうした広田にとって、死後まで英雄や国士の仲間入りさせられるのは、不本意なはずであった。
広田は、背広のよく似合う男であった。
「意外なことに、広田さんは洋服にやかましく、寸法とりや仮縫いにも、細かく注文をつけた。若いとき、ロンドンに居られたせいもあろうが」
と、部下の一人はいう。
おしゃれというより、外交官としての役目上、そうすべきだと、広田は考えたのであろう。
ただ、広田をよく知る人にまで、「意外なことに」とことわらせたのは、広田がおよそ服装などには無頓着な茫洋とした人柄であり、片田舎の小学校長とでもいった朴訥な風貌の持主であったからである。
広田は、平凡な背広が身についた男であった。軍服も、モーニングも、大礼服も、タキシードも似合わなかった。広田もまた、着るのをきらった。
「おれに公使など、できるかなあ。宴会などしょっ中だし、困るねえ」
はじめて公使としてオランダへ赴任することになったとき、広田は外交官らしくもない弱音を漏らした。昭和二年（一九二七）五月、数え五十歳のときである。
似た者夫婦というのか、七つちがいの広田の妻静子もまた、公使夫人として表に出ること

がにが手であった。広田がタキシードぎらいなら、静子はそれに輪をかけた夜会服ぎらいであった。華やかに装ってパーティの女主人公になることなど、考えるだけで頭痛がした。このため、静子は子供たちとともに日本にとどまり、広田は単身で赴任することにした。

広田は、それまでにも、北京（ペキン）の駐支公使館での外交官補生活をふり出しに、三等書記官としての駐英大使館勤務、一等書記官としての駐米大使館詰など、かなり長い在外公館生活の経験がある。

一国を代表する公使として赴任する以上、それに伴う社交生活ははじめから予想されたことである。

外交官を志す者、華やかさに憧（あこが）れてとはいわないが、華やかな社交生活の魅力をどこかに感ぜぬはずはない。モーニングやタキシードぎらいでは、外交官がつとまらぬ。広田のような弱音を吐くのは、例外であり、論外というべきかも知れない。

こうした男が外交官になり、しかも、吉田茂はじめ同期のだれにも先んじて外相から首相にまで階段を上りつめ、そして、最後は、軍部指導者たちといっしょに米軍捕虜服を着せられ、死の十三階段の上に立たされた。

広田の人生の軌跡は、同時代に生きた数千万の国民の運命にかかわってくる。国民は運命に巻きこまれた。

だが、当の広田もまた、巻きこまれまいとして、不本意に巻き添えにされた背広の男の一人に他（ほか）ならなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

その意味で、せめて死後は、と同調を拒み通す広田の遺族の心境は、決して特異なものではなかったはずである。

# 一章

福岡市の中心部、県庁に近い一画に、こぢんまりとした天神さまがある。水鏡神社、水鏡天満宮ともいう。大鳥居は二つ。県庁に面した南側参道と、橋口町寄りの北側に在る。

水鏡天満宮は、古来、地元の人々の信仰をあつめた格式高い社で、北側鳥居の掲額の文字も、旧藩主である「侯爵黒田長成謹書」とある。

これに対し、南の鳥居の掲額にある「天満宮」の文字については、署名がない。のびやかな美しい字だが、これを書いたのが、無名の一小学生であったからだ。

この小学生は、氏子総代の令息などというわけでもなかった。実は、鳥居の工事をした石屋の息子であった。

石屋は息子の字のうまいのが自慢で、ときどき墓碑の字などを書かせていたが、天満宮の鳥居にも、ぜひ息子の字をかけたくなった。

一月に三十五日分働くというので、「三十五日さん*」というあだ名をつけられた働き者の石屋。道楽も遊びも知らぬ朴訥な男の親馬鹿に似た望みである。

天満宮側とのやりとりがあった。

幸い、天神さまは子供の習字の神様でもある。示された文字が堂々として美しいので、神

社側は使う気になった。石屋の熱心さに負けただけでなく、これが天神さまにふさわしく、子供たちを励ますことにもなると思って。ただし、無名の少年の筆だから、少年の名は入れさせなかった。この少年が後に首相になろうとは、神ながら知る由もなかった。

戦災で福岡の街の様相は一変し、広田の名残りとなるものはほとんど失われた中で、わずかに、この鳥居の文字だけが残っている。

鳥居の三文字は、少年の広田にとって、名誉であっただけではない。そのことが、広田の人生の行路を左右するきっかけともなった。

広田の父徳平は、小さな石屋に年季奉公したあと、その働きぶりを認められ、そこの養子になった。そして、近くのこれも小さな素麺屋の娘タケと結婚。男の子をもうけた。明治十一年二月十四日のことである。

若夫婦は、はじめて授かったこの子供に、丈太郎と名づけた。多くを望まず、ただ丈夫にだけ育って欲しいというねがいをこめて。

広田丈太郎は、その名どおり、元気に育った。

後年、広田が総理になったとき、新聞記者にとり巻かれた徳平は、上機嫌でいったものだ。

「うん、あれを育てるのに、別に苦労なんかしまッせんたい。人間はなァ、飯さえ食わしとけば自然に大きうなるもんたい*」

広田の後には、三人の弟妹が生れた。

六畳一間の暮しから出発しただけに、最初の中、石屋「広徳」の生活は苦しかった。

広田も小学校低学年のころには、学用品を買う金をつくるため、藺草を抱えて、

「藺草やァ、藺草ァ」

と売り歩いたり、焚きつけ用の松葉を集めて売り歩いた。あるいは、葬式の行列の白張提灯持ちをして小づかいを得たこともあった。

だが、両親そろって、「三十五日さん」で、朝は明けぬ中から夜は深更まで働き続けたため、「広徳」は、広田が高等小学校に進むころには、職人を使うほどになり、広田はときどき帳面づけを手伝ったり、使い走りをすればすむようになった。

習字に励んで字がうまいだけでなく、よく勉強し、学業はいつも優等の成績。ひとり山歩きに出て、星を眺めて寝たり、万国地図に見入っていたりする少年でもあった。

もちろん、徳平は、このよくできるおとなしい長男に、高等小学校を卒えたら、石屋「広徳」を継がせるつもりでいたが、少年広田の才能を惜しむ知人から、中学へ進ませるように懇々と説かれた。

当時、東京でも中学へ進むのは、一クラスの中、四、五人という時代。「石屋の小伜がとんでもない」としぶる徳平に、しかし、知人は説き続けた。そして、その説得の決め手となったのが、次の文句であった。

「あんたの息子は、いまでさえ、天神さまの額のようなあんないい字を書く。中学へやれば、どんなすばらしい字を書くことになるか知れんぞ」

石屋徳平は、この文句に動かされ、息子を途中から中学に上げることにした。勉強好きだが、親の決めたとおり高等小学校だけで終ろうとしていた少年広田の前に、こうして、思いがけぬ新しい道が開けた。もっとも、「広徳」のあとつぎになるという父子の目標に変りはなかったのだが。

県立修猷館中学の二年に編入された広田は、三年になるときには、百九人中二位という好成績を示した。

その後も卒業まで無欠席で、英語数学は常に九十点以上。「注意深く勉強心厚し」と通信簿に書かれる優等生生活が続いた。

広田は、ただ勉強の虫ではなかった。禅寺へ座禅に通い、町の柔道場へも休まず出かけた。どれだけ投げとばされても相手に立ち向って行くというねばり強さのおかげで、よく優勝もした。

この柔道場が、玄洋社の経営によるものであり、広田は学友とともに玄洋社に出かけ、論語を中心とする漢学や漢詩の講義を聴いた。

頭山満、箱田六輔らの玄洋社は、もともとは自由民権運動のための政治結社で、「第一条、皇室を敬戴すべし。第二条、本国を愛重すべし。第三条、人民の権利を固守すべし」の三カ条をその「憲則」としていた。

ただ、玄洋（玄海灘）ひとつ隔てて大陸をのぞむ土地柄だけに、韓国の亡命の志士たちの世話をするなど、対外的な関心は強かった。

たまたま明治十九年、清国の北洋艦隊が長崎へ入港したとき、その水兵たちが子女に乱暴しようとし、これをとめにかかった警官を追って、警察署へ乱入して暴行するという事件が起った。いかにも日本を軽視した事件、しかもそれがすぐ近くで起っただけに、玄洋社では、それから後、民権論よりも国権論、国権の伸長を第一に考えようという姿勢がいっそう強くなった。

漢学や漢詩の講義は、そうした玄洋社の精神風土の中で行われていた（もっとも、広田は玄洋社の正式な社員でなく、生涯、そのメンバーにはならなかった）。

広田が中学四年のとき、日清戦争が勃発した。

海ひとつ向うでの大国相手の戦争に、広田は学友たちとともに若い血を燃やし、軍人に志願することを考えた。

だが、広田にさらに大きな衝撃を与えたのは、翌年の講和後起った三国干渉である。「日本の遼島半島領有は東洋平和を害する」というロシヤ、ドイツ、フランス三国の強硬な申し入れに押しきられ、日本は講和会議で獲得したばかりの遼島半島を、条約の批准直後に清国へ還付しなければならなかった。

巨大な三国と清国との結託の前に、国力の劣る小さな日本はなすすべもなかったが、それにしても、日本には外交の力というものがなさすぎた。戦争には勝ったが、外交で負けた形であった。

若い広田は、情けなくて仕方がなかった。まわりを見渡せば、軍人になろうとする若者は

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com